

政治思想学会会報

JCSPT Newsletter

第2号

1996年2月

CSPT・1995年大会および1996年大会について

半澤 孝磨

(1) CSPT 1995年大会は、4月7日-9日、イェール大学で開催された。大会の共通テーマは〈Private Ethics and Public Spirit〉とされ、これに従って以下の六つの全員参加のsessionが連続して設定された。"Religion and Public Life", "Family Values", "Privacy", "Free Speech and Civility", "Justice", "Round Table on Brian Barry's Treatise on Justice"。主な報告者は、この大会の組織者Alan RyanのほかIan Shapiro, Brian Barry, George Kateb, Richard Arneson, Iris Young, Jean Cohen, Kent Greenwalt 等であった。この共通テーマは、同じくイェール大学で開かれた昨年の〈Democracy and Difference: Changing Boundaries of the Political〉との連続性を強く予想させるものであったが、CSPT大会が、共通テーマとして政治理論と政治思想史の問題を隔年に取り上げる方向にあるためか、本年の報告は圧倒的に政治理論中心であった。本大会の議論の中心を一言で言えば、justiceの問題であったと思う。もちろん、上記の各部会のテーマからうかがわれるように、問題は政治、とくにデモクラシーの問題と不可分ではあるが、大会での議論は、宗教、プライバシー、家庭、女性の地位、少数者の問題、公的発言における責任性等、ある意味ではデモクラシー以前の、社会生活における最も根幹の部分にかかわるものが多かった。これは私には、前号のこのニュース・レターで昨年の大会について千葉真氏が報告された中にある「今日のアメリカの代表的政治理論家たちにおけるデモクラシーの哲学的基礎の探究の断念とでもいえる事態を、どのように評価したらよいでしょうか」という言葉とも重ね合せて、きわめて興味深

く、アメリカと日本における政治理論家たちの危機意識の強さの落差を思い知らされる感が深かった。ただし、昨年とは違い、大会参加者の数は必ずしも多くはなく、常時数十名、全体を通して百人を超えなかったと思われ、その中には明らかに保守的な立場の人々は見られなかったもので、述べられた意見がどれほど代表性を持っているものなのかは必ずしも明かではない。とは言え、この事実だけからアメリカにおける政治理論の世界の意見の分極化を推定するにはもちろん慎重でなければならないであろう。

なお、議長A.Ryan氏の好意的配慮によって、4月8日に開催されたExecutive Committeeに半澤が出席し、日本の政治思想学会のこれまでの経過、取り上げたテーマ、また、とくに1994年、従来の本質的にアド・ホックな研究会から正式の学会として発足し、現在会員二百数十名、順調に発展しつつあること、経済的にはまったく貧困であるが（もっともこれはアメリカのCSPTも同じようではあるが）、とくに若い研究者たちのアメリカとの交流を強く望んでいること等を紹介した。

(2) CSPT 1996年大会は、3月22-24日、New OrleansのTulane Universityで開催される。今回の組織責任者John Pocock教授から次のようなプログラムが寄せられている。

Provisional program: "The Politics of History"; a conference to be held at Tulane University, New Orleans, March 22-24, under the auspices of the Murphy Institute of Political Economy and the Conference for the Study of Political Thought. For further details enquire of Professor Richard F. Teichgraber III, Director the Murphy Institute, Tulane University, New Orleans LA 70118 (local arrangements) or J.G.A. Pocock, History Department, Johns Hopkins University, Baltimore MD 21218 (program organiser).

First session: AM, Friday, March 22.

Panel 1: The historian as political actor; academy, polity, society.

Presenter: J.G.A. Pocock (History, Johns Hopkins University).

Discussants: John G. Gunnell (Political Science, State University of New York, Albany); Carroll Smith-Rosenberg (History, University of Michigan).

Panel 2: The American historian as public being. Presenter: Thomas Bender (Humanities, New York University). Discussant: Wilfred M. McClay (History, Tulane University).

Second session: PM, Friday, March 22.

Panel 3: The German historian as public being. Presenter: Wolfgang Mommsen (History, University of Dusseldorf). Discussant: Martyn P. Thompson (Political Science, Tulane University).

Panel 4: Public history and the politics of exhibition. Presenter: Charles McGovern (Museum of American History, Smithsonian Institution).

Discussants : Mark Crispin Miller (Writing Seminars, Johns Hopkins University) ; David G.Heffman (History, Tulane University).

Third session: AM, Saturday, March 23.

Panel 5: The politics of literary form; narrative and metaphor.Presenters: Kirstie McClure (Political Science and Humanities, Johns Hopkins University) ; JoAnne Brown (History, Johns Hopkins University).
Discussant : Jonathan Lamb (English, Princeton University)

Panel 6: Enlightenment experiments in multicultural history.Presenters: Melvin Richter (Institute of Advanced Study, Princeton); J.G.A. Pocock (History, Johns Hopkins University). Discussant: James Moore (Political Science, Concordia University).

Fourth session: PM, Saturday, March 23.

Panel 7: The silenced and the subaltern in history.Presenters: Michel-Rolph Trouillot (Anthropology, Johns Hopkins University); Partha Chatterjee (Centre for Studies in Social Sciences, Calcutta); Discussants: Julie Mostov (History and Politics, Drexel University); John H. Toews (History, University of Washington).

Panel 8: Histories in encounter: the case of New Zealand. Presenters: Paul McHugh (Sidney Sussex College, Cambridge); Manuka Henare (Maori Studies, Victoria University of Wellington); Andrew Sharp (Political Studies, Auckland University).

Final session: AM, Sunday, March 24.

Panel 9: Historiography and the modern Indian state. Presenter: Vivek Dhareshwar (Centre for Studies in Social Sciences, Calcutta). Discussant: James Tully (Philosophy, McGill University).

Panel 10: History and practice: the philosophy of Michael Oakeshott.
Presenters: Timothy Fuller (Political Science, Colorado College);
Bhikhu Parekh (Political Science, University of Hull).

=====

ECPR (European Consortium for Political Research)に参加して

松本礼二

すでに日本政治学会会報に大嶽秀夫氏が書かれていることですが、1995年4月27日～5月2日、フランスのボルドー大学で開かれたヨーロッパ政治学会 (ECPR) に日本政治学会派遣チームの一員として参加しましたので、この件につき政治思想学会の会員のみなさまに報告します。大嶽氏も書かれているように、もともとこのプロジェクト

は日本政治学会前理事長 村松岐夫教授とヨーロッパ政治学会会長との間で、日本とヨーロッパの政治の比較研究を両学会の共同研究として組織しようという合意がなされたことに発しています。具体的には、大嶽氏とエクシター大学スティーヴン・ウィルクス教授との間でプランが練られ、第一歩としてどのようなトピックについて共同プロジェクトが可能かを検討する *planning session* が今回開かれたということです。もっとも、こうした経緯を筆者が予め知っていたわけではありません。詳しい事情はつまびらかにしませんが、政治学会の国際交流委員長、北岡伸一氏より、政治思想の分野でこのプロジェクトに関与する余地はないかを検討する意味で参加してほしいとの要請があり、ECPRの何たるかもよく知らずに急遽加わったのが実情です。

日本からの参加者は大嶽氏のほかに、久米郁男(神戸大学)、加藤淳子(東京大学)、在英中の田中明彦、樋渡展洋(ともに東京大学)といった陣容で、世代的にも専攻分野の点でも筆者が異分子であったことは否めません。ヨーロッパ側の参加者も国際政治学のスーザン・ストレンジ教授やオクスフォードで日本政治を教えるストックウイン教授など、比較政治や日本政治、あるいは国際政治の研究者でした。要するに、ECPRという組織が現代政治分析の研究者の集まりであって、思想史や政治哲学の専門家はほとんど加わっていないようです。日本政治学会の方には政治思想研究者がかなり多く含まれ、それにはそれなりの理由があるということを知ってもらう意味で、筆者は"Political Theory and Political Science in Postwar Japan"と題する報告を読みました。ただ日欧の現代政治の比較との関連で、政治思想の研究者が貢献できるトピック、それを英語で自由に討論できる人材は、残念ながら具体的に思いうかばず、大嶽、ウィルクス両教授とも相談の上、今回のプロジェクトに政治思想の分野から加わるのは難しいという結論になった次第です。政治思想との関連を別にして、どのようなトピックを対象にプロジェクトが動きだしているかは、政治学会会報の大嶽氏の記事をごらんください。

日本政治学会の推進する今回のプロジェクトに政治思想研究者の果たすべき役割を見出せなかったのは残念ですが、会議そのものは、筆者にとっても興味深いものでした。各ワークショップの参加者は全員がペーパーを提出し、期間中は午前午後のセッションに毎日拘束されるというヘヴィーな日程で、それだけに充実した議論がなされました。話題が日本政治に関することが多いとはいえ、この分野では日本の若い研究者が英語で対等以上に議論を戦わせられるという事実にあらためて印象づけられました。政治思想の分野でも、海外の研究者との交流をさらに深め、内容のある共同研究を組織できればと思います。

ナショナリズム思想の捉え方

中谷 猛

近代フランスのナショナリズムを論ずる場合、二種類の国民感情・意識に注目しなければならない。M. ヴィノックによると、それは「開かれたナショナリズム」＝自由・平等・友愛に基づく寛容な精神と結び付く祖国愛と「閉ざされたナショナリス

ム」＝デカダンスから生じた偏狭で排他的な精神と結び付くフランス至上主義とである。既してこの国の歴史では、左翼ジャコバン的ナショナリズムから右翼排外的ナショナリズムへの変容として理解されてきた現象であり、この変容には経済危機や議会の腐敗以外に普選にともなう政治意識の覚醒、新聞などマス・メディアによる政治宣伝などが大きく作用している。

だが、複雑な諸要因の合力が生み出すナショナリズムの思想と行動の考察にはこの二分法的な接近は必ずしも有効でない。なによりもこれら二つの思想傾向は国民感情において混交しており、状況によって相対立し、また共存したりする波状交差の性格をおびているからである。そのうえ、政治の世界での正や負の情熱・情念、例えば独立志向やルサンチマンはどの時代や社会にもある。ある社会の無意識的な領域とも接合するこうした情念が思想史のレベルでどこまで認識しえるのか。

第三共和政の確立期では、理性の政治を目指し議会共和制の擁護論が主張されると、この既成体制に不満をもつ民衆は、この合理性の文化に支えられた政治に反発し、感情政治に走る。ルサンチマンを抱く民衆の心を捉えるものは大革命以来の直接民主主義の伝統にほかならない。かれらの意識には制度選択の次元の問題が絡む。こうした半ば無意識的な状況ないし領域の組織化にナショナリズム思想と運動の特質があるとすると、思想史の一つの課題は、この特質を生み出す統合力の理論的説明にあるように思われる。

※このエッセイは、最近、M. ヴィノックの「ナショナリズム・反ユダヤ主義・ファシズム」（藤原書店）を訳出された中谷会員に、同書をめぐって特に執筆いただいたものである。－事務局

政治思想学会理事の追加承認

（1995年5月27日政治思想学会第2回総会において承認）

塚田 富治、星野 修（監事）、和田 守 [50音順]

政治思想学会94年度会計報告*

収入	金額(円)	支出	金額(円)
前年度繰越金**	402,569	通信費	131,619
会費***	664,000	印刷費	47,754
利子	935	消耗品費	76,534
		謝金	257,500
		諸費****	22,248
		会計超過分返却	2,000
		94年度繰越金*****	529,849
計	1,067,504	計	1,067,504

* この報告書は、93年7月5日より95年3月31日までの収支に関するものであり、飯島、吉岡両監事の監査を受けた後95年5月27日の理事会において承認され同日の総会において報告された。

** 前年度繰越金とは小笠原弘親氏より送金された分(280,009円)と佐々木毅氏の振替口座にある分(122,560円)との合計金額である。

*** 会費とは、95年3月31日までに納入された会費の合計金額である。

**** 諸費とは、故藤原保信氏葬儀花代である。

***** 繰越金の内訳は、普通預金が379,104円、佐々木氏口座が122,560円、振込口座が27,000円、現金が1,185円である。



会員の異動



政治思想学会会报
JCSPT Newsletter NO. 2



1996年度政治思想学会研究会
(企画予告)



日時：1996年5月25-26日
場所：日本大学文理学部（京王線下高井戸駅下車）

テーマ：市民社会論再考

パネル1：市民社会の諸理論

報告：メルヴィン・リクター（ニューヨーク市立大学）
加藤哲郎（一橋大学）
都築勉（信州大学）
司会：佐々木武（東京医科歯科大学）

パネル2：文明の多様性と市民社会

報告：スニル・キルナニ（ロンドン大学）
小島毅（徳島大学）
鈴木則夫（長野県立短期大学）
司会：佐藤慎一（東京大学）

パネル3：市民社会と現代の諸問題

報告：李静和（成蹊大学）
中村敏子（北海学園大学）
廣岡正久（京都産業大学）
司会：菊池理夫（松坂大学）